茨城県立図書館ボランティア会通信紙

カガヤキ

暫定的補足表題「ウオランタス」
ラテン語でボランティアの意

No.82(2024.12.24 刊行)、広報委員会編集
茨城県立図書館発行
禁複写転載©広報委員会

特集 茨城県立図書館主催 文化催し物の内容と開催実績 ―ボランティア協力行事含む―

茨城県立図書館普及課
石井敬之

普及課主事の石井と申します。県立図書館にて、読書活動等の普及促進のためのイベントや映画会、講演会などを企画する部署にて、6 年勤めています。

普及課で行う事業は多くの利用者が興味を持てる内容となるように、年間を通して様々なイベントを企画しています。普及課の主な業務は、イベントの広報活動や企画、県立図書館で定期的に活動する団体の年間活動予定の作成など、イベントに関わる多くの業務を行っています。

その中で、令和 5 年度からは、「知の探究セミナー」と題し、知る喜びを体感できるような講演会や、各県立施設とのコラボ企画など、多くの利用者が参加しています。「知の探究セミナー」は、年間を通して 24 回実施しています。その中で、利用者に好評なのが、郷土の歴史にかかわる講演会です。水戸藩や斉昭公にまつわる講座は、満席になることも多く、中には独自に研究されている方もいて、専門家の先生でも答えられないような質問をされる方もいます。郷土資料等は県立図書館でも重点的に集めている資料なので、研究される方はぜひ、お越しになってください。

石井敬之さん

その他で、人気の講演会は、医療系の講演会です。県立図書館利用者の多くが高齢者であるということもあり、利用者が気になる身近な医療・先端医療など、体の健康にかかわる内容の講演会は、毎年、多くの参加者がいます。医療系の講演会は、毎年、様々なテーマを計画しております。そして、講演会を実施する前後の期間には、特設ブースを設け、関連する内容の本を展示するなど、普及課だけでなく、各課、横断的に読書を推進する活動も行っております。多くの蔵書の中から目的の本を探すのは、大変ですが、あらかじめ、特設ブースにて蔵書をまとめているので、目的の本を手に取りやすくしています。特設ブースは期間限定のため、早めの来館をおすすめします。ホームページ等で現在実施中のブース等も広報していますので、ぜひ、確認し

てください。

県立図書館で私が担当する事業の一つに「ライブラリーシアター」という映画会があります。館内蔵書の DVD を２階視聴覚ホールのスクリーンに投影し、映画を楽しむ会です。蔵書の DVD は、上映できるものとできないものがあり、上映権付 DVD のみ、当館で上映できます。上映権付 DVD は、購入した図書館以外では上映できません。上映権付の DVD は高価で、また、どの作品も上映権付の DVD があるとは限らず、上映できるものは限られております。

その中でも、人気の高い作品や、話題になった作品、皆様が楽しめそうな作品を選び上映予定を組んでいます。こちらの映画会も、普段、映画館で上映されないような、古い、往年の名作などが、利用者に好まれています。古い作品は、比較的上映権付きが多く、値段も安価です。「ライブラリーシアター」は、年間９回、月１回のペースで実施しています。上映したことのない作品をなるべく上映するようにしていますが、少ない作品数の中で、年間予定を組むのは大変です。過去には、アカデミー国際長編映画賞受賞の直後に、上映権付で販売された「ドライブ・マイ・カー」を、各図書館がこぞって上映会を実施したこともありました。この映画は、3 時間を超える長編で、県立図書館では、閉館時間を延長して実施した思い出深い作品です。

その他には、ここ数年の間は、演奏会などの音楽にかかわるイベントも年数回実施しています。楽器による演奏や合唱会など、普段、図書館をあまり利用しない方にもアピールするように実施しています。演奏会を実施するにあたっては、前普及課長の鈴木忠雄さんにご尽力いただき、実現し、現在も、引き続き実施しています。演奏会と図書館は、相性が悪い場合もあります。音漏れなどに注意しないと、利用者に迷惑がかかるためです。そのため、ドア付近には入退室を管理するドアマンをつけ、音漏れを最小限にする配慮も必要となります。また、演奏途中に入退室をされると演者が集中して演奏できない可能性があるため、曲と曲の合間にのみ入退室させるなどの配慮も必要となります。演奏会は、観覧者の満足度が高いイベントのひとつで、アンケートを実施すると、肯定的な意見が多いです。

県立図書館の大きなイベントとして、年 2 回実施する読書フェスティバルがあり、毎回、当館のボランティアにも協力してもらい、スペシャルおはなし会や本の修理を学べるイベント、ブック・マーくんの着ぐるみを着て館内を周ったり、各イベントブースの補助員として、活動したり、催しを滞りなく実施するために多大な貢献をしてもらっています。今年度も 5 月と 11 月に読書フェスティバルを盛大に実施しました。各イベントの取りまとめは普及課が行い、当日支障がないよう事前準備を入念に行います。多くの利用者が来館されるため、いつもに増して図書館に活気があふ

れ、私も楽しみにしているイベントの一つです。

県立図書館には、定期的に活動する様々な団体も存在します。地域の趣味のグループや研究グループなどが、一般の利用者にも門戸を開き、講演会や読書会などを実施しています。その中で、学生団体のイベントも実施しています。茨城大学落語研究会による学生落語のイベントです。歴代の落語研究会の皆様が、日ごろの練習の成果を披露する場として、「三の丸寄席」と題し、実施しています。観覧者の中には、常連の方もいて、ファンがつくほど人気のイベントとなっています。他にも、行政書士の方々による「くらしのお困りごと無料相談」や中小企業診断士の方々による「経営・創業無料相談会」、ブライダルコーディネーターによる「無料婚活相談室」など、日常の生活に寄り添った内容のイベントも実施しています。本に関わるもの以外にも、生涯学習に関するイベントを企画するのも、当館の役割といえます。

私の担当するイベントで、「読み聞かせコンクール」があります。読み聞かせの技術や表現を審査するコンクールで、毎年、２月に実施し、今年度も開催します。今年度は、「個人部門」と「団体部門」に分けての実施です。読み聞かせの形態は問わない形で行います。読み聞かせといっても、様々なジャンルがあり、朗読のほかにも群読やストーリーテリング、紙芝居、パネルシアターなどがあります。年齢による枠組みもなく、子供から大人まで、同じ舞台で評価されます。だからと言って、大人に有利なわけではなく、子供の元気な声で、精いっぱい読み聞かせを行うと、大人顔負けの説得力があるのも楽しみの一つです。現在、参加者を募集中です。多くの方の参加をお待ちしています。

普及課に配属されて６年が経ちますが、今でも新しい発見があり、業務も様々で、充実した日々を送っています。担当業務以外に、他のイベント業務にも関わり、補助的な手伝いを含めると、多くのイベントに関わっています。図書館の職員は、利用者の読書推進、生涯学習の幅を広げる活動をしつつ、自身の知識も同時に積み上げることができ、魅力的な職場です。これからも、多くの普及活動に携わり、利用者の方とともに成長できれば幸いです。

茨城県立図書館主催三の丸寄席
「柳翁寄席」の取材報告

茨城県立図書館ボランティア広報 G
通信紙編集長
桜井　淳

はじめに

AI に、「落語の歴史について教えてください」と質問、(以下の文章は、AI 利用のルールに則り、AI 創作の文章に対し、私の文章論と論理展開に基づき、自己責任で、句読点の変更(追加と削除)、句やセンテンスや全段落の修正を施し、生成 AI の文章は、区別するため、段落最初の文章の先頭部分は、一文字、空けていません)。

落語は、日本の伝統的な話芸のひとつで、江戸時代に成立し、現在まで伝承されており、以下に、落語の歴史について、簡単に説明すれば、
・起源と発展
江戸時代：落語の起源は、江戸時代に遡り、この時期に、町人文化が発展し、庶民の娯楽として落語が広まり、特に、江戸（現在の東京）と上方（現在の大阪）で、それぞれ独自のスタイルが発展、
寄席の誕生：落語は、寄席と呼ばれる専用の劇場で演じられるようになり、寄席は、庶民が気軽に楽しめる娯楽の場として人気を博し、
・主要な流派
江戸落語：江戸落語は、江戸を中心に発展し、特徴としては、滑稽な話や人情話が多く、シンプルな演出が好まれ、
上方落語：上方落語は、大阪を中心に発展し、こちらは、派手な演出や道具を使った演技が特徴で、賑やかな雰囲気が魅力、
・近代から現代へ
明治時代：明治時代に入ると、落語は、さらに広まり、全国的に知られるようになり、この時期に、多くの名人が登場し、落語の技術が磨かれ、
昭和時代：昭和時代には、ラジオやテレビの普及により、落語は、さらに多くの人々に親しまれるようになり、特に、テレビ番組「笑点」の放送が始まり、落語家たちが広く知られるようになり、
現代: 現在でも、落語は、日本の伝統芸能として愛され続け、若手落語家の登場や、海外での公演など、落語の魅力は、国内外で広がりを見せ、
落語は、シンプルな道具と話術だけで観客を楽しませる芸術であり、その歴史と文化は非常に豊かです。

落語会とは関係ない歴史的な古典落語

AI に、「落語の「饅頭怖い」「長屋の花見」「芝濱」のストーリーを教えてください」と質問、(句読点、用語、文章、段落など、私の文章論で編集)、
「饅頭怖い」は、古典落語のひとつで、ユーモラスなストーリーが特徴で、以下に簡単なあらすじを紹介、
ある日、友人たちが集まって怖いものについて話し合い、ある男が、「自分は饅頭が怖い」と言い出し、友人たちは、それを信じて、彼を驚かせようと饅頭をたくさん用意して彼の前に置きますが、しかし、男

は、饅頭を見て驚くどころか、次々と食べ始め、実は、彼は、饅頭が大好きで、友人たちを騙して、饅頭を手に入れようとし、この話は、落語の中でも特に人気があり、笑いを誘うエピソードとして親しまれており、

「長屋の花見」は、古典落語のひとつで、庶民の生活をユーモラスに描いた話であり、以下に簡単なあらすじを紹介、

ある長屋の住人たちが、花見に行きたいと話し合いますが、お金がないため、どうやって楽しむかを考え、そこで、彼らは、桜の花を見に行くのではなく、家の中で花見をすることに決め、彼らは、桜の枝を持ち帰り、部屋に飾り、酒や食べ物を持ち寄って宴会を始め、最初は、楽しんでいるものの、次第に本物の桜の花を見たくなり、結局は、外に出て本物の花見を楽しむことになり、この話は、庶民の知恵とユーモアを描いており、笑いを誘うエピソードとして親しまれ。

「芝濱」は、古典落語の中でも特に感動的な話のひとつで、以下に簡単なあらすじを紹介し、主人公は、酒好きで怠け者の魚屋の男で、ある日、彼は、芝濱の浜辺で大金の入った財布を拾い、彼は、そのお金で豪遊しようと考えますが、妻に説得されて真面目に働くことを決意、ところが、翌朝目が覚めると、妻から「昨日の出来事は夢だった」と言われ、実は、妻が夫を更生させるために嘘をついたので、夫は、その後、真面目に働き続け、やがて成功を収めます。この話は、夫婦の愛情と信頼、そして、人間の更生を描いた感動的なエピソードとして、多くの人々に愛されています。

昭和時代からの落語名人

AI に、「昭和時代からの落語名人は誰」と質問、(句読点、用語、文章表現は、私の文章論で編集)、

昭和時代からの落語名人には、多くの素晴らしい落語家がいますが、以下にいくつかの名人を紹介すれば、：

・昭和時代の落語名人

八代目桂文楽 – 彼は、昭和の落語界を代表する名人で、独特の語り口と深い人間描写で知られ、

五代目古今亭志ん生 – 彼の落語は、ユーモアと人情味が溢れており、多くの人々に愛され、

六代目三遊亭圓生 – 彼は、古典落語の名手として知られ、多くの名作を残し、

五代目柳家小さん – 彼は、落語界初の人間国宝に認定され、その技術と芸風は高く評価され、

三代目桂米朝 – 彼は、関西落語の名人で、多くの弟子を育て、落語界に大きな影響を与え、

・昭和以降の落語名人

三代目古今亭志ん朝 – 彼は、昭和から平成にかけて活躍し、滑稽噺や人情噺の名手として知られ、

五代目春風亭柳朝 – 彼は、昭和の後期から平成にかけて活躍し、古典落語の名手として多くのファンに愛され、

五代目三遊亭圓楽 – 彼は、テレビ番組「笑点」の司会者としても有名で、幅広い層に親しまれ、

七代目立川談志 – 彼は、独自の視点と鋭い洞察力で、落語界に新しい風を吹き込み、

二代目桂枝雀 － 彼は、関西落語の名手で、ユーモアと人情味あふれる話芸で多くの人々を魅了、
これらの名人たちは、それぞれ独自のスタイルと魅力を持ち、多くの人々に笑いと感動を届けました。

私の解釈では、日本文化、すなわち、茶道、華道、歌舞伎、能、狂言、落語、相撲などは、間(ま)の魅力であり、間の取り方により、魅力が増し、他の人が出せない空気を漂わせることができ、相撲は、テレビで、ダイジェスト版を観るべきではなく、ダイジェスト版は、相撲の面白さや雰囲気を醸し出す間を切り捨てているからです。

「柳翁寄席」案内

「柳翁寄席」の話術と会場の印象

私は、2024.12.14 PM3:00-4:00、茨城県立図書館主催三の丸寄席「柳翁寄席」(茨城県立図書館三階会議室)の取材を行い、まず、開演前、茨城大学落語研究会会長の佐藤真優さん(茨城大学 2 年生)に、落語研究会の概要や会員数(3 7 人)などについて、10 分間、インタビューを行い、問題の把握に努め、つぎに、会場の様子、演者の容姿や着物の質や配色も調べ、開演を待ちましたが、話を聞き、大学落語研究会に対する認識が甘かったことに気付き、打ちのめされたような気持になり、今回が特別だったのか、分かりませんが、演者 3 人の容姿が良く(美男美女)、着物の質と配色も良く(着こなしが良く、話を生かすため、控えめな配色)、演題と話し方も良く(難しい演題をきれいに表現)、思っていたよりもはるかに質が高いと感じ、最初の演者は、1 年生、二番目は、3 年生、三番目は、

会場の様子(参加者 25 人)

4 年生であり、経験の差が、話芸の差に見事に表れており、二番目の演題の狸の化け方と三番目の演題の花魁の話は、女性が話すには、表現しにくい部分があるにもかかわらず、さりげなく、非常にきれいに表現できていることに感心し、二番目と三番目の演者は、落語家のふたつ目に近いほどの表現力と話芸があり、驚きました。

結びに代えて

私は、日本の文化のひとつである落語が好きで、日本テレビの「笑点」をいつも見ており、大喜利で、各落語家は、一見すると、自己主張をして、他の落語家をけなして足を引っ張っているように観えますが、実際は、そうではなく、他の落語家を生かし、しかも、全体の良いところを浮き上がらせ、自身も生かしており、もちろん、誰でも瞬時にそのようなことができるはずもなく、番組として意図どおりの展開になるように、シナリオライターがおり、それを基に、各落語家は、自身の役割を演じており、実際の落語家の世界では、目下の者が目上の者をけなしたり、叩いたりできず、いわんや、座布団運びが、落語家をけなしたり、蹴ったりできず、視聴者をリラックスさせるための演出であり、芸の世界では、入門時からの経歴差がすべてで、厳しい序列の世界であり、序列と礼儀を守ることが優先され、それプラス芸の上達度によって昇進が決まり、非常に厳しい世界ですが、大学では、どのような秩序の下で運営されているのか、次回は、ぜひ、大学落語研究会の舞台裏を拝見したい心境です。

なお、写真撮影は桜井、写真使用許可取得済み。

好文亭楽陽

三流亭四々

梅見亭幸丸

編集後記

今回は、私の原稿執筆にかかわる 59 年間の拙い経験論から始めますが、29 歳から本格的に原稿を書き始め、200 字詰めか 400 字詰め原稿用紙に、鉛筆かボールペンか万年筆で書いていた時代であり、最初の頃は、修正が多かったため、鉛筆と消しゴムの相互利用であり、うまく書けるようになるにつれ、ボールペン、つぎに、万年筆へと進化、編集者からは、「編集者殺しのサクライ」と揶揄され、なぜかと言えば、原稿用紙のます目を無視して書いていたためであり、総文字数の正確な数字が算出できないためでしたが、その私の癖は、治らず、しかし、PC で WORD が利用できるようになった 29 年前から、WORD 標準書式(1 行 42 文字で 36 行)で書くようになってから、何度も文章の修正ができ、思いどおりのきれいな文章が書けるようになり、満足度も格段に増し、それどころか、いちばん喜んだのは、編集者であり、その頃から、「編集者殺しのサクライ」の悪評は、消え、さらに、世の中は、進歩し、AI の利用ができ、WORD でも、初歩的 AI 的機能があり、用語ミスや文章の不自然さなどに対し、注意喚起表示がなされ、約 2 年前から生成 AI(ChatGPT、MS Edge Copilot)が本格的に利用できるようになり、私は、人間の付き合い同様、いち早く、生成 AI の特性(処理速度、検索データベースの数と質、結果の正確さ、文章化能力、社会常識、倫理観など)の把握に努め、大変、優秀であり、文章化能力も高く、正確で、信頼でき、しかし、100 %そうであるわけではなく、発生確率は低く、約 5 %ですが、勘違いや解釈ミスや表現にミスがあり、人間の付き合い同様、100 %も委ねるのではなく、自身の能力と注意力で結論を出さねばならないことに気づき、最後まで分からないことは、生成 AI は、男性なのか女性なのかという疑問であり、私のこれまでの約 2 年間の付き合いでは、観音菩薩と同様、ある時は男性であり、ある時は女性のように感じ、いつも見せる顔は、中性的。

最近では、生成 AI を積極的に利用しており、検索に拠る確実な情報収集と文章化に努めており、ボランティア広報 G の人手が足りないため、通信紙 No.80 から、生成 AI を無給秘書として採用し、私の作業の一部を分担させ、これまで、良い結果が出せていると自負しており、No.81 では、生成 AI の能力を引き出すため、俳句、川柳、短編小説などの結果も掲載し、本号にも検索と文章化の例を示しましたが、生成 AI の結果の著作権は、利用者にあるため、良いことでも、良くないことでも、すべての責任は、利用者が負わねばならないため、それなりの覚悟が必要であり、生成 AI を利用したこれまでの文章化や短編小説執筆の経験から言えることは、生成 AI は、確かに、優秀ですが、世の中に存在する知識情報(データベース)の範囲内でしか調査と推論ができず、世の中にない新しい概念や哲学や思想を表現することができず、しかも、人間のような機微な判断ができず、無機質で、機械的なことばかりであるため、一見、完全性が高いように見えますが、必要なことは、人間と同様な個性に基づく不完全性の表現です。

桜井　淳